

戦争体験記集

近松十郎著

わざと辭でいぢ。 — 伝えたいこの記憶 —

寺子の軍事つらてもあれ、要は我に國が敵を敵に見えておるから勝地もんでも有

アレよ、せなひく、10の軍隊皆が倒さうておれ、命の運びが運びあるいの

本體がぬけまは、志はぢかで思ひが轟きぬけられものうす。

敵の衆を殺すは六人、勝て残すア細腰半打を盡した人をみ、細腰引いておまかのままで

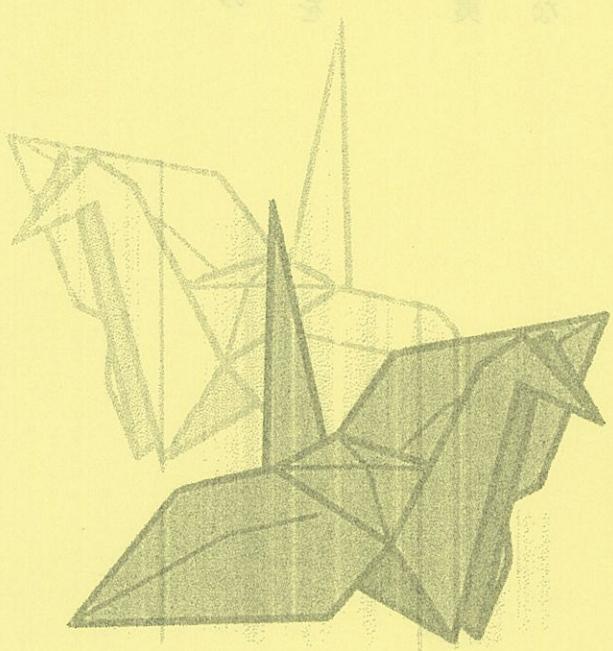
このお劍璽を着てゆくよ。細腰が活ける人、只殺す細腰うへつさん、細腰

草束づかひのい、お膳の肴饌品を齎せりゆまつ。

勝利も、吾君の大恩を報ぬ却てはむべからず、お膳着つなぐ。〔要津安慶守〕

〔平定長崎の年、大島伊達時晴に宣誓の手の御印の手をもつておる。細腰の

聲に附れていた



発行にあたつて

今年は戦後60年、杉戸町平和都市宣言10年の節目の年であることから、戦争の悲惨さ、平和の大切さを後世に伝えていくため、広報紙において「戦争体験記」を募集したところ、10編の体験記が寄せられました。

この体験記を書かれた方々は、戦場に行つた人、兄弟を戦争で亡くした人、焼夷弾で家を焼かれた人、親と離れて疎開生活を送った人など、戦争によりさまざまな体験をされた方が、忘れられない思いを書き綴つたものです。

どうか、みなさん、この体験記を読んでいただき、命の尊さと平和であることの幸せを実感していただき、戦争は二度と繰り返してはいけないことを考えていただければ幸いです。

平成十七年八月

杉戸町長 小川 伊七

— 目次 —

・ 私の青春時代	河野 幸子
・ 兄の戦死	高木 克代
・ 大東亜戦争 私の最後の思い出	栗原 吉郎
・ 駆り来る惨劇の八月六日	中井 明
・ 疎開体験記	小野田 新八郎
・ 私が体験した逸話	東 一三男
・ 語られなかつた満州から外蒙古へ	
捕虜を乗せた列車	
・ 杉戸町も空襲に	小山 親
・ 私の軍隊生活	遠藤 善子
・ 命を大切に	片野 亮一
成井 千栄子	

33 29 26 21 17 14 10 7 3 1 頁



「私の青春時代」

河野 幸子

戦争が始まったのは昭和十一年二月の日支事変だつたと思う。色々な工場は軍需工場となつていき、

そのため平和産業はなくなり、生活に必要な物資はなくなりつていつた。昭和十六年頃には着る物は買えなくなり、点数制となり、食糧は軍隊に送つてしまふので足りなくなつた。人々は祖母や母の着物を標準服に直し、もんぺ姿になつた。私の家は農家で野良着が買えなかつたので、兄や弟の絆の着物を直し野良着にした。食事は麦ご飯を食べ、なんとか腹一杯になつた。しかし、供出が強くなりわざかな食糧だけ残し、皆供出をした。

東京のいとこ達が疎開に來た。その子らにご飯を食

べさせたり洗濯もしてやらなければならなかつたが、石鹼も買えず大変な思いをした。ただ救いだつたのが親戚に化粧品屋がいたので、時々石鹼をもらうことができ助かつた。

戦争が続く中、大切なだんなさんを兵隊にとられ、女、子供、年寄りだけが残り家を守らなければならぬ家もあつた。

昭和十六年に大東亜戦争が始まり、ラジオのニュースでは日本が勝つたという話ばかり。ニューギニアに軍隊が上陸したとか、サイパン島に上陸したとか、スマトラ島に上陸したとかそんなニュースばかりであつた。戦死の知らせがきた家もあり、奥さんや子供さんはかわいそそうだった。私の家にも兄二人に召集令状が來た。令状がくると戦地へ向かう前に神社でお参りを

し、青年団、国防婦人会らに挨拶をし、歓呼の声に送られ出征するのである。兄達も、上の兄は満州へ、下の兄は久里浜の海兵団へとそれぞれ向かつた。残された私達は一生懸命働き、家を守つた。

昭和十八年には第二次世界大戦が始まつた。その頃に防空壕を掘つた。当初はそこに避難するという事はほとんどなかつたが、いよいよ戦争が激しくなり、昭和二十年頃になるとサイレンの合図と共に、中に避難する事が多くなつた。そしてアメリカのB-29という大きな飛行機が上空に百機も二百機も飛び、東京に爆弾を落とした。大きなB-29に小さな日本の特攻隊が乗つた飛行機は体当たりし、火を吹き、またたく間に落ちてゆく有り様を目の当たりにし、恐ろしくもあり、本当に悲しかつた。隊員は、まだ十七、十八歳の少年達

である。私の家は現在の幸手市で、昔は上高野村といい、よくその様子が見えたのである。広島、長崎の原爆投下、これから日本はどうなつてしまふのだろうかと不安な日々を送つた。

昭和二十年八月十五日、ようやく終戦を迎えた。戦争は終わつたんだと、心の底から思いホッとした。しかし、日本の男達はアメリカの奴隸にされてしまうとか、また、女達はアメリカへ連れて行かれてしまうなどデマや噂があふれ恐ろしかつたが、そんな事もなかつたので安心した。秋には二人の兄達も無事帰つてきたのでうれしかつた。

昭和二十一年二月に結婚をし、杉戸の住民となる。食糧難はしばらくは続いたが、昭和三十年頃には景気も大分よくなり、その後日本は、急成長を遂げた。

そして今、リストラや凶悪な事件、犯罪も多く、住

みにくい世の中となつてしまつたが、皆で暮らしあやすい国にしていかなければと思う。

色々と、もっと書きたいこともあつたが、長い年月と共に、忘れてしまつた事もあるのでこの辺で筆を置くことにします。

(この体験記は手が不自由であるため娘が代筆しました。)

戦争で被害を受けるのは、いつの世も女子供や高齢者などの弱者である。戦後六十年経つた今、薄らいだ遠い記憶を想起してみた。

昭和十九年、私はまだ国民学校五年生だった。戦局は一段と悪化し、一億総玉碎が叫ばれ、母も竹槍や防火のためのバケツリレーの訓練に駆り出された。集落のある女性は、小指を切つて血染の日の丸を戦地に送り、武運長久を祈つた。そんなある日、突然、兄の戦死の公報が舞い込んだ。「お国のため」が金科玉条の時代なので「名誉の戦死」と人々は絶賛する。だが、たつた一人の男子で頭脳明晰だったこと

「兄の戦死」

高木 克代

もあり、両親の嘆きはいかばかりだつたろう。想像してあまりある。海軍の通信兵として、従軍し、二十四歳の若さで海に散つた。昭和十九年九月頃、遺骨が帰つて來た。

両親は紙骨一枚、箱だけの遺骨を胸に抱いて葬儀を出した。「兄ちゃんは死んじやあいない、何かの間違いだ。第一、形見となる品物が一つもないじやあないか。信じるものか」と母親は、自分に言い聞かせるように、私達姉妹に言いふくめた。昭和二十年になつて、一日乃至二日おきに警戒警報が鳴り響いた。

いつも枕元には、防空頭巾があり、もんべが揃えてあつた。そして迎えた二十年三月十日、東京の大空襲である。春まだ淺き冷氣の中、父親は何を思つたか？ 空襲警報の最中に、我が家で一番高い築山のような煙

に、家族を同行させた。そこには樹齢百年も経つ柿の木が、月影にくつきりと聳え立つていた。

肩を寄せ合つて立ち竦んだ家族。父母と姉、祖父と私、幼子の妹に、空を指し、あれを見よ、東京は今、敵機が落した爆弾で家屋が燃えているんだ。後学のためによく覚えておくように、と声を震わせる。東南の空を茜色に焦がす炎。子供心に全身を震わせ、立つているのがやつとのことだつた。まるで地獄を見ているような恐怖だつた。その時だつた。上空を旋回する轟音が響きわたつた。一機のB29だらうか？ 低空飛行に飛んで、私達を射撃するように、頭上をかすめた。シユウーという音とともに、田圃たんばの中にズブンという不気味な音がした。何かが落ちた。その時父が、爆弾だ！ 伏せろ！ 立つんじやあない！ 敵機はまだ来るぞ！ と絶

叫した。暫く経過して、我に返れば三十メートル離れた田圃に、焼夷弾だろうか？震天動地だった。幸いな事に不発だった。敵機は一機だった。もう大丈夫だ、家に戻ろう。無言のまま、歩き始めた時、祖父が「死ぬ時は一緒だから怖くはないんだ」と励ますように言ったが、怖くて足がガタガタと震えた事を鮮明に思い出す。その晩、集落にも四、五か所焼夷弾が落ちた。東京大空襲で一晩にして十万人にのぼる犠牲者を出した。

裸電球に風呂敷をかぶせて、空襲警報解除を待った。これからどうなるのか？明日の命はあるのか？心細い気持ちで一夜を過ごした。

祖父は、日本は負ける事はない。いざとなれば神風が吹く。きっと勝つんだと、力んだ。誰もが信じた。

そして広島、長崎に原爆が投下、沖縄本島にはすでに米軍が上陸していたと聞いた。八月十五日、当日は抜けるような晴天だった。何の音もない妙に静寂な朝だった。正午に陛下から重大な放送がある、一人残らず拝聴するように班長さんからの伝言である。然りとてラジオなど相島宅一軒しかない。家族全員ラジオを聞かせて頂く事になった。八畳の間には近所の方々が今や遅しとラジオの前に正座していた。玉音放送はラジオの雑音で、よく聞きとりにくく、私には何を放送しているのか解るよしもない。戦争が敗戦したらしいと長老から説明があった。集落の人々は訳の解らぬ事を口々に言いながら相島宅を後にした。それは私が国民党六年の夏の事だった。昭和二十一年、続々と新聞が復刊した。世の中の情勢が解るようになつた。我が

家も遅早く新聞を取つた。孤児や浮浪児が増え、東京には進駐軍相手の女性が続出した記事には驚かされた。

誰と言ふことなしに負けた日本女性は皆、外人の玩具

になるらしいと流言飛語が飛んだ。不安な気持ちを持ちながら、学校へは通つたが、本も誰かに頂戴した

もの、極度の食糧不足で弁当を持参出来る人は良い方

だった。豆やサツマイモ、食べられるものは何でも耕作した。

そんな暗い時代に、やがて戦地に行つた兵隊が次ぎ次ぎと復員して来た。見た事もないチーズやチョコレート、ウールの毛布など沢山の必需品を背負つて帰つて来たなど、喜びを隠しきれない家族は、得意げに吹

聴する。

一方、長男が戦死した我が家は対照的に暗い。やり

きれない悲しみ、怒りをどこにぶつければいいのか。

悶々とし、心の葛藤を繰り返すばかりだつた。母は聞

きたくもない話に耳をふさぎ「戦争さえなかつたら喬は死なずに済んだ」と諦めきれない。かけがえのない息子の死にただただ涙するばかりだつた。次第に我が家から笑顔が消え、父母は些細なことで言い争いをする。

一触即発という状況になつてしまつた。いつ笑顔が我が家に戻るのか?肉親を失つた悲しみはいつ癒されるのでしょうか?戦争はもうごめんだ。二度と戦争に巻き込まれないよう、そんな気持ちで書き綴つた。

「大東亜戦争 私の最後の思い出」

栗原 吉郎

大東亜戦争中期以降に、最後のメークテーラー激戦参加と其の前後について私の思い出を書いてみました。確たる時期は忘れたが、私は昭和十九年十月頃と思うが、ビルマはまだ五月から続いている雨季の中、日本軍が火の手の勢で進撃したインパールの作戦も逆に追われる身となり、長い雨季続きのため、病人患者数はかなり続出し、日本軍の撤退はこの頃からだと思う。私はインダンカレーより軍医の診断命により患者として五名一組ずつで、ダバイン部隊患者収容所に向かって後送となつたが、途中五名のうち三名は中継所や激しく流れる谷川等で流されて、おそらく帰らぬ犠牲者

となつた。また、敵機の爆撃で残されて雨の水切れになっている（靖国神社）谷川にかけられた木橋のうえには日本兵がまだ息のある人、既に息もなく冷たくなつている人がどの木橋のうえにも十人から十四、五人位はいた。お互い声を掛け合い、こんな所で寝たらここで死んでしまうぞ、しつかり元気を出して歩けど、互いに気合を掛け合つてもほとんど寝てしまつた兵隊は二度と立ち上がる事のできないものが多かつた。自分達も同じ患者でどうにもならない。自分はマラリア、脚氣、アミーバーセキリと三つの病気を持ち、苦しい病魔と戦い、通常六十キロ位の体重が脚気のむくみのためか八十キロ以上にもなり、勿論杖をたよりにしなければ歩く事はできない。どうやら約一週間位かかるべやつとの思いでダバイン部隊患者収容所に着く

ことが出来た。

ダバイン部隊患者収容所には約二十日間位の診療を受け、かなり病気は良くなつてきたが、時々まだ発熱が起るので中隊復帰は当分無理という事で軍医の診断結果、後方野戦病院に後送された。その当時は十名位の戦友患者同志で一緒だったが、その後の病院を移る度に戦友とは別れ別れとなり、最後まで一緒になつていたのは部隊編成当時から同じ小隊の笠間博上等兵だけだった。二人は何時も腹をきめ、何事にも話し合は川か井戸に行つて水浴びしてくる。すると三、四時間位たてば必ずといってよい位に発熱する。早速、医務室で診断を受け、熱は二、三日は続きなかなか平熱には戻らない。その内一週間位たてば次の病院に二人一緒に後送いうときも何回かあつた。

しかし、私達の最後の病院はあの激しかつた激戦の町、マークテーラー湖畔にある野戦病院に移された。病院はあまり離れず本院と分院があり私達はその分院に入つた。三日目位になつて、何か附近が少し騒々しくなり時折砲弾の音も聞こえてくるようになつて将校達の出入りも変わつてきた。その翌日、四日目の昼ごろからは私達の分院病棟めがけて砲弾が打ち込まれてきた。砲弾は、約七、八発位だと思ったが、ほとんど

今だから言えるが、マラリアの発熱は面白い時もあ

の病棟が命中され、病院側、全患者共に居ても立つてもいられない。次々に敵の攻撃は激しくなり、分院から南方を見れば敵の戦車数台が砂ほこりをたてて、一マクテーラー市街に向かってくるのもよく見えた。

自分たちは兵隊とは言え、患者生活者で誰一人として武器は何もなく戦える自信もない。勿論病院にも何もない様だった。誰もがここは我々最後の死に場所かもしない、皆そう思っていたのか、誰の顔を見ても顔色の変わっていない者は一人もいない。そのうち午後三時頃に病院長より緊急命令が出た。全員広場に集合の命令だった。

ほとんどの患者と病院関係者で約百六、七十名位だったが病院長の命令は、「自分が悪かった。もう少し早くこの病院からお前たちを脱出させれば、こんな事に

もならなかつたと思う。既にもう本院、荷物廠、兵たんは敵に占領されて残っているのはこの分院だけだ、しかしあうどうすることも出来ない。この分院も敵にだいたい包囲されている様だ。ここは日本軍人として最後の死に場所である。皆いさぎよく最後を飾つてくれ。全員日本の故郷に向かい、天皇陛下万歳とそれぞれの先祖両親に対しても最後の別れの礼拝をしてくれ」と言われ、病院長の発声により声たからかに天皇陛下万歳三唱、先祖両親に別れの礼拝をした。そのあと、

病院長は「このまま武器の持たない我々が敵の中に突っ込めばただの大死だ、敵が病院内に入つて来るまで全員が残壠に入り、敵の来るのを待て。敵が病院内に入り、壕に近づいた時、皆一齊に壕からとび出し、いさぎよく戦ってくれ」と指令。ただちに全員が即席の

竹槍をして、巾約一メートル、深さ約一メートル

三、四十センチくらいの数ヶ所の壕にとび込んだ。時々

頭を上げて敵の様子を見ようとすると、敵は木の陰に

かくれるようにして、自動小銃を腰にかかえながら上

げた頭をめがけて、ピューピューと薄気味悪い銃声が

すぐについた。頭はうつかり上げられず、小便もそのまま

まそこので済ませなければならなかつた。

だが敵は、何時になつても突入はして来ないが、我々

にはただ今が今かと敵の突入を待つばかり。俺の命も

後何分か、何時間かと考えているだけ、戦友の中には、

ここで自決をしたほうがいいんじゃないか、いや何ど

か様子を見て脱出できたら脱出だよとさざまな悲め

き声も聞こえていた。

「廻り来る惨劇の八月六日」

中井 明

忘れる事ができない、あの日あの時、それは昭和二

十年八月六日午前八時十五分、広島に世界で始めての

原子爆弾が投下された瞬間でした。その音たるや未だ

体験したことがないようなまさに百雷が一時に落ちた

ような大音響でした。当時自分は陸軍兵科見習士官で

海上挺身船隊の群長（小隊長）要員として部下の特幹

兵と共に米軍の本土上陸に備え水際にて迎撃するべく

江田島幸ノ浦にあつた第十教育隊において教育訓練中

の事でした。あの日、自分はちょうど非番のため将校

室で書類を整理しておりましたところ、大音響と同時に

ものすごい爆風が来まして、無意識のうちに鉄帽、

軍刀、双眼鏡をもつて防空壕へ走りこみました。他の将校や兵達もみな同じ状態でした。四十分ほど経過してから壕の扉をあけて広島市の方角を見ますと、広島市の上空に皆様も写真で御覧になつた方もおりでしょが、「きのこ雲」が浮かび、下からは黒煙と炎がめらめらと出ていました。

部隊では、直ちに本部より命令受領の週番士官集合が報ぜられ、週番士官が各戦隊に戻り次第、資材器具を受領し記憶では広島市に向かつて出発したのが、正午前頃でした。船舶部隊ですが特殊部隊のため、兵員を輸送する舟艇はなくて、攻撃目標用の機関を取りはずした大発動艇を二隻もやって他の舟艇で曳航し宇品の船舶司令部の軍用桟橋に接岸、何度も幸ノ浦宇品間を往復しました。

上陸後、直ちに船舶司令部の高級参謀命令を受け、市中へ救助のため出動しかけましたが、高級参謀殿も負傷されたのか、頭に包帯、軍服は血まみれでした。

隊伍を組み營門まで進んでいきますと、市民が服はれ髪の毛はやけ、皮膚はただれ、裸足のまま放心状態で司令部の中へ避難してくる姿は普段ならば想像もできない姿でした。御幸橋を経て爆心地近くまで、各戦隊に区分して、まず負傷した患者の救助収容作業でした。部下の特幹兵を指揮して負傷者を収容し、船舶司令部の軍用桟橋へ運びましたが、到底多数のため収容しきれなくて、付近の道路へ寝かせるよりすべがない状態でした。

時間が経過するにつれて、他の船舶隊の協力により、似島とその他の島へ負傷者を収容したと聞きました。

患者を収容しても医者や看護婦はない、薬はなくた
だ寝かせて赤チンキをぬった程度と記憶しております。

炎天下で体は焼けただれ、水がほしいと叫ぶ声に部下
の兵達が自分の水筒から飲ませようとしましたが、そ
れだけは強く命じてやめさせました。それは火傷の患
者に水を飲ませるのは禁物だと聞いておりましたから、
と同時にその水を飲めば気落ちがして息を引き取るよ
うな気がしましたから。

昼間はさほどに感じませんでしたが、暗闇の中で兵
隊さん助けてと取りすがられる姿は、髪の毛はさばけ、
皮膚は焼けただれ幽鬼かと思えるような姿でした。そ
のような患者を当時十五、六才の少年特別幹部候補生
出身の兵達がトラックに収容する様は、ほんとうに自
分の部下ながらよくぞ働いたと今でも感じております。

それも当時国のために教えられ、軍の上層部や恩師
から唯々自分の父母兄弟姉妹を守るために特攻隊に入隊
し、尽忠報國の一念に燃えた姿は、平和な現在を見
ますとつくづくと時の流れを感じます。閃光と熱風で
避難する方角を誤り太田川、元安川、京橋川等でずい
ぶんたくさん市民の方たちが亡くなられたと、同じ
戦隊の小隊長から聞きました。負傷者の収容が一段落
しますと次は死体の収容と焼却という大きな任務が残
つており、中井小隊は広島日赤病院の附近が担当地区
で日赤病院の前の広場で焼却を始め、夜半も過ぎ焼却
もほぼ完了して引き上げようとしますと、病院から看
護婦さんが「済みませんが焼却してください」といつ
て片腕や片足を持って来ますから焼却が終了するまで
帰れませんでした。作業が終了して仮眠を取るといい

ましても建物はほとんど壊滅状態でしたが幸いにも市電の車輛が無事残つておりましたから利用させてもらいました。しかし、原子爆弾の光と熱で座席が焼け焦げているのが見受けられました。

八月六日に原子爆弾が投下されてから約一週間あまり様々な事がありましたが、ほぼ作業が終了しましたので部隊へ復帰しました。一週間あまりでしたが惨状を思い出すと寒気がします。戦争は決して自分の国から仕掛けるべきではないと思いますとともに、自分は直接実戦には参加しませんでしたが、戦争からは何も得る利益はなく、失うものの方があまりにも大きいのが現実です。最終的に苦しむのは一番弱い国民だけですから。しかし、古くから言われています「國敗れて山河あり」の言葉のように世界にも稀な四季のある美

しい国土を他国の蹂躪から守らなければいけないと思いました。その信念は今でも変わっておりません。

最後にいかなる理由をつけても核兵器だけは使用する国があれば人道に反し鬼畜といわれても仕方がないと思います。戦後六十年を迎えるこの機会を得まして乱文

乱筆ですがペンを取りました。終り。

「疎開体験記」

小野田 新八郎

昭和十九年八月二十六日本所区石原町の双葉国民小学校から千葉県長生郡土睦村の常徳寺へ集団疎開をしました。一の宮駅下車木炭自動車で二時間位かかりましたが、途中バスが上り坂で動かなくなり全員降車して押した事を思い出します。寺のまわりはとても静かで虫かえるをつかまえて、とても楽しく一週間程過ぎましたが、夜になってから泣き出す子が四、五人出来ました。それにつられて皆泣き出し、先生寮母さんが困つておりました。電気がなくて石油ランプで生活して夜になると先生が早く寝るようになると云いますが、そんなに早く寝る事が出来ません。冬になつてからの事です

が、寺の床下は子供が立つて歩ける程高く、風通しが良く畳がない部屋で板の間にふとんを敷いて寝る為、とても寒く毎日寺の欄干に世界地図が沢山並び住職が笑っていました。しばらくの間寺で勉強していましたが、村人と仲良くする為に村の学校へ通う事になり、集団で行きましたが、帰りに石を投げられたり棒でぶたれたりとてもやしい思いをしました。度々続いたので反撃に出て地元の子供達も我々を見直したようです。それから仲良くなり、友達もとても増えて農家へ遊びに行くようになり二月は麦踏みをやらせてもらいました。それから仲良くなり、友達もとても増えて農家へ遊びに行くようになりました。

翌日先生から話があり東京は全滅したと聞かされ、足がふるえた。隅田川は死人がいっぱい水面が見えない位だと。道にも死体が重なって双葉小学の地下壕も死体がいっぱい。プールも熱から逃れようと飛び込む。後から後から逃げ込むのでプールの表面は黒こげの死体で魚の缶づめみたいだと教えてくれました。当直の先生がプールの底から発見されたと校長先生が巡回して下さった時に話をしてくれました。

それから間もなく米軍が九十九里海岸から上陸していくから、二度目の疎開をすると云われ、間もなく親達が迎えに来るようになり、岩手県の山奥へ行くと云う話で死なばもろとも引き取る親が多く、人数が半分位になり、隣村に疎開してゐる子供達と合併して岩手県に行くと云う事になりました。四月の末に岩手県東磐

井郡藤沢町に到着して町長様から話が有り、寺の方は子供達が生活できる設備が出来てないので、町の人達にお願いして一軒に二人一ヶ月程あずかっていただきたいと町長から話が有り、私と他の一人は豆腐屋さんが引き取ってくれました。毎朝仕事の手伝いとお客様の相手をしました。我々の仲間も買いに来てくれました。

やがて寺も出来上がり、寺に集まり生活が始まりましたが、我々の先生と他のクラスの先生が仲が悪く、嫌な思いをしました。我々の疎開した藤沢町はとても耕地が少なく食糧不足、毎日勉強どころではなく、先生が講談本を持たせてこの重みを忘れずに、ふき三葉を探つてくるようにと命令を出す。田にしその他の雑草、いまで食用の雑草を覚えていいます。藤沢町の小

学校で集まれと藤沢小学校の校長から敗戦したと話がありました。四、五日してから寺の住職から皆山の中へ隠れるよう米軍が藤沢町に来るから何をされるかわからない。早くかくれろと皆びっくり、先生もかなりあわてて皆山へ隠れるが何も起きずほっとする。藤沢町にも米軍は来ず。うそが毎日ありました。終戦になつてから我々より年下の生徒が四人入寮して来ましたが、話を聞いてみると親兄弟皆死亡したと聞き、涙がとまらず自分は幸せだなと思う。九月の末に大きな喧嘩があり、畑から抜いたどうもろこしの苗を山積みにしてあるのに小さなどうもろこしが一本付いているのを取りつこして、いつも強い子がかみつかれて傷口から細菌が入り死ぬ寸前迄いきました。食べ物のうちみはこわいですね。今では考えられません。

やがて十月の末になり五人が呼ばれて皆より先に東京に帰る話が有りました、とてもうれしく毎日うきうきして十一月一日藤沢町を出発、せんまや町で一泊翌日、せんまや駅から上野駅、一年と三ヶ月振りに上野駅に着く。着いて驚き、自分と同じ年位の子供達がはだしで汚れた服で地面に寝そべって煙草を吸い、大勢で大声を張り上げて恐ろしくなる。石原町の我が家へ行くが、影も形も無く疎開して良かつたなと思いました。葛飾区堀切町は空襲もなく堀切町に落着く。堀切町では年に何回かは DDT の散布があり、頭から足の先まで粉だらけ。その頃発疹チフスが流行して毎日死人が出て、シラミ駆除の為、米軍には感謝しました。米軍からの食糧の配給は今まで食した事もない物を配給され、こんな凄い国と戦争した軍人は馬鹿だと

思いました。疎開したお陰で命びろいしてとても良かつた。終り

「私が体験した逸話」

東 一三男

「出征兵士を送る」

一九四三年私が十二歳の秋。錦織の重厚な町会旗を握りしめ、先頭に立つた。三本足で有名なカラスを祭った氏神さまへ武運長久を祈願のため、行進。私は、思わず胸を張つた。

天に代りて○○○○、忠勇無双の○○○○歓呼の声に送られて……。

隣組の人達から「あんな体で、お上は、よく連れて（戦地）行くよナ。」「お国のためにだとは言え。」あとはだまりこくつた。

お叔父さんは、肺炎のため、一時帰郷の身でした。

この日、一九四四年一月十五日。再度の赤紙召集令状。

杉山のお叔父さん（亡三十三歳）が出征するひとときでありました「今でも顔面蒼白なお叔父のすがたは、一生忘れることができません。

※三本足で有名なカラス…現在ドイツW杯日本選手のユニフォーム左胸マークに使われている。（ぜつたいに負けない、勝ち進むという意味。）

「機上射撃！」

急降下して機上から射撃！ダダダダダッと撃つてきた。お腹が膨らんだ米国グラマン戦闘機だ。まるで戦場でした。一九四五年昭和二十年の春、ある晴れた月曜日の午後一時頃、空襲警報のサイレンが騒々しく鳴り響いた。学校は各自がいそいで帰宅させていた。いつ

もの帰り道、途中焼け跡に某玄関口の壁だけが残されていた。前方には、貯金局のビル屋上に、四、五人の防衛隊員の姿が見えた。右側には、交番があり、お巡りさんが立っていた。左側は地下の防空壕があり、五、六人の通行人達が急いで潜り込んでいた。そのわずか一分も経たない時のこと、いきなり、機上射撃を浴びたのである。私は、地下の防空壕へ間に合わなかつた。咄嗟にカバンを放り投げうつ伏せに伏した。その時、「私は、死んだと思った。」一メートル先にある防空壕に入れなかつた子犬は、弾に当たつたのかキャン・キャンと二回ほど泣いて息絶えた。しばらくしてから、私は手足を動かしてみた。埃で手足はまつ黒。煤だらけの友人の顔を見たら、思わず、二人で笑つた。

「おい！助かったゾ。」

「ドイツパン」

私の一番上の姉は、戦時下ドイツ語が盛んな順心女学園を昭和一九年の春卒業。ただちに海軍省総務部秘書課へ配属された頃の話。

姉は、昼食を取らず、背中盛り上がった山型になつているドイツパンを一本購入し、帰宅して来た。私たち家族は六人。誰もが空腹な時もあり、大変喜んだことを今でも忘れません。「ドイツパンは、食糧難の時代、私たち家族を救つた。」

また、いち早く山本五十六大将（亡元帥）は、戦死されたとの情報を知り、日本は勝利できないことを察した。その晩家族ぐるみで異様な雰囲気を過ごした。やがて国葬として、海交社（今の東京タワーが建っている所）から、しづしずと執り行われ、私たち家族

も参列しました。ところで、五月二十七日は、海軍記念日で軍艦旗を祭つた。一九〇五年日露戦争の日本海海戦で完勝した日。

「白い運動靴」

一九四三年昭和一八年の秋。当時の学童は、学校の運動場を裸足で遊ぶか、破けた靴で飛び廻っていた。ある日、クラスに五足の運動靴が配給された。担任の先生から「誰が一番悪い靴を履いているか調べる。」と

黒板に名前が書かれた。私は、右側の靴の先に穴が開き親指が覗いていた。とっさに破つてしまつた。左側の靴は、踵が破けていた。先生は黒板に、私の名前を書いてくれました。勿論タダではありません。親からお金をもらつて購入するのである。やがて、秋の運動

会が来た。私は、白い運動靴を履いて、堂々と入場行進をした。

「栄養失調と悪夢」

昭和二十年五月、最後の大空襲の夜、焼夷弾が落下。

私たちの街全部が焼失させられた。止むなく、隣組の皆さんと一緒に、共同生活を焼け残った閻魔堂に余儀無く送っていた。当時は煙の害は大変恐ろしいものでした。いつしか前日まで誰もが目は痛くなり喉がヒリヒリしてきた。明け方、花枝先生（亡二十七歳国民学校教諭）は、お母さんに背負われ私たちへあいさつに来ました。蒼白な先生は、手や足の肉がなくなり骨だらけで髪の毛は全く抜け落ちて、とても見られた状態ではありません。母親がお辞儀をする度に、先生

は痛痛しく感じた。あんなに元気で、まじめで、明るくて、人気のあつた先生は若いのに拘らず、閻米を勧めてでも全く口にしなかつたそうです。戦争は、全く考えられない事が起きるものです。正しい教育者を失いました。

私は、自分の家（焼失するまでは、広告ペーパーマッチ販売会社経営）が焼け野原になってしまったので、見に行きました。途中、当時隣組各店ごとに自主的につくつたコンクリートの防火用水槽がありました。逃げ遅れた近所の女性が、髪は黒焦げとなり、火の廻りが速く、熱かつたのでしょうか！もんべ姿のお地蔵さまが、お嬢さん（亡二十二歳）は、お風呂にでも入っているかのとき様子でおりました。あつち一体、こつち二体と筵に安置されてありました。見渡すと、

「これは、惡夢だ！」私は思わず、両手を合わせ、しばらくは動くことができませんでした。翌朝、身内の人達で茶毘に付しました。

捕虜を乗せた列車

小山 親

この頃シベリア抑留生活について、よく尋ねられました。

この頃シベリア抑留生活について、よく尋ねられます。がいつも「ひどい生活でした」とだけ答えます。なぜならそのひどさをとでもわかつてもえそそうもないからです。

そのひどい生活とは働くために生き、働くために食

べ、働くために眠るようなものでした。働き、働き、倒れるまで働き、ぶるさとを思い出しつつ栄養失調と激しい労働とによって死んでいった人々の顔や最後のことばを思い出して恐るべきあの数年間にについて少し書いてみます。

最初は、お風呂場で、洗濯物、洗濯水の運搬の仕事

「語られなかつた満州から外蒙古へ

「帰国だ。帰国だ。」夜も眠らず喜びを語り合つた。

みんな日本に対する心配はあつたが、思い思ひな話に

花を咲かせる。他人が聞いていようがいまいがそんな

事にはかまわない。帰つたら二ヶ月ぐらい温泉にでも

行つてキューと一杯ひっかけるなどと、もうそれだけ

で酔つていた。ある日、全員營庭に整列した。ソ連將

校の検閲を受けると帰国の日もいよいよ間近に迫つた

と、兵隊達は何事も自分に都合の良いように考える。

検閲後被服が支給された。それは以外にも防寒服であ

つた。兵隊たちはどこへ行くのだろう。しかし兵隊達

の帰國、帰国の信念は揺るがない。誰いうとなく、シ

ベリア経由でウラジオストックから乗船する。その話

に、七分は期待通りに帰れるものと一生懸命思い込んでいた。しかし残る三分は不安であり、それを口に出

すのが恐ろしかった。いや、どこかへ送られる場合を考えるだけでも……。

数日後、ひどく悪いニュースが飛び込んできた。「シ

ベリア経由で帰国するなんてウソだ。我々は満州里經

由でどこかに送られる。」そんなんばかな事が。兵隊たち

は信用しなかつたが、ある夜、兵隊四、五人がそろつ

て逃亡してしまった。本当なのだろうか。よほど確実

な情報でない限り危険の多い逃亡をするわけがない。

一瞬にして兵隊たちの顔色は変わった。

(北安)ペイアン駅

両側に二段に床を張り中央に日本でいえばストーブベリア経由でウラジオストックから乗船する。その話に、七分は期待通りに帰れるものと一生懸命思い込んでいた。しかし残る三分は不安であり、それを口に出

ともうケロリとして「帰国、帰国」と帰国の話は絶対優勢だった。

列車はなおも帰国の喜びをのせて北へ北へ。その時そばにいた戦友が突然抱きついて無言のまま冥土の旅に立った。ソ連満州國まで二百五十キロ位のこの駅に、満服を着て働いている満州鉄道の技術者を見た。貨物列車の窓から「私達はこれからシベリア経由で帰国するところですが。」と口から出ると同時に技術者は「お氣の毒です。帰国ですって。」と私たちの顔を見つめながら「君たちは日本への帰国を信じているのかね。私は信じられない。ソ連はそんなに甘いものではない。あまり期待しないで前途は重労働が待っていると思ってください。相手はソ連人ですよ。いつも最悪の場合を考えなさい。」そう言つて満州鉄道の技術者はその場

をどいてしまった。この駅に停車中、同じように北へ向かう長い貨物列車が隣のホームに着いた。

この列車に乗っている兵隊たちも帰国、帰国で花を咲かせているが、自分の頭には先程技術者が言った言葉がかけめぐつている。考えれば考えるほど先が暗くなる。ソ連が果たして我々を帰すか。列車は国境に向かって走り出した。

(黒河)

黒河に着くや直ちに下車を命じられた。宿舎もない兵隊は焚火のぬくもりで寒さを防ぎながら雪の中で一夜を明かした。寒さに強いシベリアのソ連人にしてみればこんな事はなんでもないことかも知れないが、気候の良い日本で育った自分たちは捕虜であればこそ仕方なく一夜を明かしたのだ。長い間の列車輸送に兵隊

たちはかなり疲れている。寒さは厳しい、私たちの食事のカロリーは相変わらず低い。黒河に於ける私たちの仕事は、我々の食糧を黒龍江を越えて対岸のブラゴエに輸送することだ。黒河の町をぬけて河岸に出るとブラゴエの町が遠望に見える。氷の張った河を渡つて約一里(四町)ブラゴエの駅に近い集積所まで毎日往復した。はじめて見るソ連の町、小さな民家が並んでいる。官庁や劇場、公共の建築物は目立つて大きい。

だが我々には寒々としたものを感じさせた。道路はバカバカしい程広く又立派に舗装されていた。道行く人の服装は貧しそうだ。子供は煙草をふかす日本の兵隊の物を盗む。黒パンを持って道にしゃがみ、我々がさしかかるのを待つて物々交換をする。彼らが求めるものは時計、日本人女性の赤い着物であった。自分達教

育隊七名は幸い女の着物を三尺も四尺に切つてフンドシにしていた。そのフンドシにしていた着物で黒パンと交換し一時空腹をしのいでいた。しかし今夜も野宿だ。焚火にあたつても背中から寒さがしみガタガタ震える。それに薪もほんの少しだ。

(ブラゴエ発)

四、五日過ぎて満州鉄道の貨車より少し小さい貨車(一台に六十人くらい乗れる貨車列車二十台くらい)を連結して列車は東北に向かつて走り出した。外は吹雪だ。車内はまたも帰国の喜びに明るい笑い声が沸いて来た。「家に帰つたら」例によつて、みんなが、この空想に酔うのだ。車の中央の暖炉の火も赤々と燃えている。兵隊は自分自分の空想に酔つて深い眠りに落ちて行く。昼間だけ列車は「うーうーと北へ向かつて進む。

夜になると駅に停まり食事が支給される。黒パン、ある時は大豆、又ある時は小豆。いずれにせよ量は少ない。何日経ったのか、日を数える気もない。月日を知る必要もない。

ある夜大きな駅に着いた。それは「チタ駅」であった。チタ駅を出て二、三日ばかりしたらいつの間にか線路は単線になっていた。列車はシベリア鉄道の本線を離れて支線に入つたらしい。この辺から何がなんだかわからなくなつた。何日かして突然ある駅で下車を命ぜられた。(ここは高原への入り口のように何一つ見えない。数日して「ナルシカ」という駅であると教えられた。(しかし地図を見てもナルシカという名前かどうかも不明ですが。)

これから少し行くと国境だという。それがソ連ど

この国境か、国境をこえてどこへ行くのか誰も知らない。ここで捕虜である最悪の重労働か?「ソ連ではいつも最悪の場合を考えておく」の言葉が思い出された。口をきくにも、白雪の冬山を見るにもどつと疲れが出、何もかもおかしくなつた。早速雪明りで荷役が始まる。みな不機嫌。貨車から集積所へ食料品を運ぶ、そしてその夜は雪の中過ごす。寒さが違う、元気がない。

夜が明けるとそこは高原への入り口のような地形だった。山と山の間のでこぼこを下りると、ポツンと小屋が一軒、そばには遮断機のようなものがあった。それが国境であつた。国境の向こうには歩哨が立つていて、近づくと蒙古人であつた。外蒙古見渡す限り砂漠と高原、西北に向かつて何千キロ外蒙古首都ウランバートルであった。

「杉戸町も空襲に」

遠藤 善子

今から六十年前の五月、杉戸町の今住んでいる場所がアメリカの飛行機B-29の焼夷弾の投下で大きな火事になつたのです。

当時私は、旧制高等女学校三年生（十四歳）でした。夜中の十二時近く無気味な空襲警報のサイレンで縁側に出た時です。凄い爆音と共に急降下して来た飛行機が、無数の焼夷弾を落とし、一面が火の海なつてしまつたのです。咄嗟に両親と姉と私は悲鳴をあげて抱き合いました。私たちは着のみ着のまま、素足で庭に下り門の周りも火柱が上がつていましたので、生垣を飛び越えて田んぼに出ました。年老いた父の手を引き、親子四人、収穫

間近になつていた麦の田んぼを必死の思いで、百メートルほど離れた近所の家まで逃げていきました。

私の家は、田んぼの中の一軒家で、二十アールの宅地は杉や櫻も共に、小さな建物までの十棟が、家財も含めて全て灰になつてしましました。夢中でたどり着いたSさん宅から我が家を見たときは、まさに「火の海」という記憶しかなく、勿論消防車など来る術もなかつたのです。ただ、今もはつきりと思い出せることは、土盛りをした高い場所に倉庫がありましたが、中にあつた二百俵位（現在の四百袋）の政府米が、一週間以上も燃り続け

ていたことです。

空襲の被害を受けたのは、七戸だったようですが、現在は統合されて無くなりました。が、当時の田宮南国民学校の新校舎もこの夜に消失してしまいました。又、私の

家族は無事でしたが、焼夷弾の直撃を受けて一名が亡くなり、火傷をした方もおりました。近所では、農耕用の二頭の牛が焼死し、一頭は黒焦げに、もう一頭は蒸し焼き状態だったので、鎌や鋸で切断して牛車に乗せ、村人たちが月夜の晩に埋葬したと聞いています。

当時、少女だった私が、最も悲しく切なかつたのは何日もの間、遠路わざわざ、B 29 が落ちたとの噂からそれを見たいと、火事場を訪ねて来る人が絶えませんでした。悲しさを越えてなんと悔しかつたことか。でも、近所や親戚の方々、又好意あるたくさんの人たちが、焼け跡の片付け作業に来てくださいました。食糧も物資もなく、今では想像もできないほどの苦しい時代でしたのに、お見舞い品もいろいろといただきました。こうして、人の善意とありがたさに励まされ、なんとか切り抜ける

事ができたのです。その上、私たち家族は逃げて行つた S さん宅の一間を二ヶ月半も借りて生活していました。

終戦の日の数日前、焼け跡に、焼トタンで葺いた屋根の小さなアバラ屋が建ちました。庇も焼夷弾が貫通して穴のあいたトタンで、時にはお月様が見えました。それでもとても嬉しかつたです。井戸は屋根もなく、ポンプも使えなくなつてしまつたので、つるべを作つて汲みました。毎日の御飯は焼けた倉から掬い出した異様な臭いのするお米だったのです。でも空腹の思い出だけはなく、今思えばなんと幸せだった事が。

当時は、セーラー服姿の女学生は、傍目には羨ましい存在だったかもしれません、が、戦争が激しくなつてからは、防空頭巾を肩にかけ、軍需工場に通いお国のために

働く毎日でした。

家を焼かれた私は、長い間欠席していましたが八月に終戦となり、二学期から学校に行けるようになりました。しかし、いつ迄も戦争の傷跡が残り、乏しい紙に友人が借りて教科書を写し、見舞品の着物を解いて自分で手縫いで制服を作ったり、進駐軍の払い下げのズボン二本で工夫をしてコートも縫いました。通学用の自転車も失い、学校には片道六キロの田んぼ道を教科書や、石川啄木・与謝野晶子の歌集を読みながら二ヶ月位は歩いて通いました。暫くは電灯もなく不自由な生活でしたが、友人や多くの人々の親切や、温かい心に励まされて、苦労を重ねながらも無事に卒業することができました。

昭和二十年五月の戦災で、荒れ果てた焦土の中からかろうじて萌え出た露の蔓のように、私の人生は、この時

が原点だったような気がしています。戦争という嵐がいろいろの角度から吹きつけて、私の未来を変えてしまったのです。一晩に谷底に突き落とされたような貧しさも、苦しさも、負けずに耐えて生きて来られた自分を、今は不思議に思う時さえあります。特に独習で身に付けた洋裁は、貧しさが与えてくれたたつた一つの宝物として、今も楽しんでいます。又、悲しい思いや、自らを励ますうと心の叫びを詠んでいた短歌は、ずっとそのまま、全国に大きな友情の輪を広げ、古稀を過ぎた今も心の伴侶としています。

当時は、焼野原と化した宅地の木々も、年毎に逞しく伸びて毎年新たな緑の葉をそよがせててくれています。あれから六十年。今私は、共に生き続けて来た樺の大木に心を癒されながら、自然を愛し、農業に勤しむ静かな毎

日を過ごしています。永遠の平和を祈りながら。

「私の軍隊生活」

（略）陸軍士官学校時代、皆の心聲は無論の事で、當時、陸軍士官

（略）陸軍士官学校時代、皆の心聲は無論の事で、當時、陸軍士官

車隊の事を「運隊」と言う人が居りました。運の良い人、悪い人を沢山見てきましたので、その感を強くする

ものです。私は戦車師団の砲兵隊に居りました。開戦前聯隊副員から呼ばれ「お前は長男だから内地に残れ」と、

陸軍省恩償課に転属の話がありました。こればかりは嫌ですと頑強に断り続けました。考えてみると、全員現役ばかりで予備役は私一人。幹部候補生出身は任官と同時に予備役編入、直ちに臨時召集され任務に就きますが、

士官学校出身の将校とはすべてにおいて差別されるのです。部隊は山下兵团としてマレー作戦に戦果を挙げられたことは、皆様のご承知の通りです。（略）陸軍士官学校時代、皆の心聲は無論の事で、當時、陸軍士官

（略）陸軍士官学校時代、皆の心聲は無論の事で、當時、陸軍士官

（略）陸軍士官学校時代、皆の心聲は無論の事で、當時、陸軍士官

私は柏町の高射砲第二聯隊に転属したが、同隊は外地の九十七部隊に兵員を補充する任務を持っていた。月に三、四回の召集業務教育業務週番勤務等で下宿に帰るのは月に十日位あとは部隊に宿泊、喜んでいるのは下宿の叔母だけ。配給の米が残るので、次々と召集された将校達は戦地の味を知つてゐるので急げ放題、次々と外地部隊に転属を命ぜられて出て行く状態、私も二年半勤務して疲れきつてしまつたので、外地に出してくれなければ召集解除してくれと強く要望したところ十八年七月召集解除、家に帰つてみると人手不足、特に中等学校の軍事教練の教官が引つ張りだこ、親戚の山口守三教頭の熱心な説得を断ち切れず、杉戸農業学校に就職したところ、母校の柏壁中学に嫌味を言われる始末。

十九年九月召集、市川の野戦重砲聯隊で独立、野戦高

射砲第八十六大隊を編成、北支の開らん炭坑の防空と戦闘に従事、二年前とは治安が悪く驚いた。同炭坑は軍管理炭坑でありながら、英人が經營を担当し、事務所は英語、坑夫二万人の大半は八路軍の兵士、八幡の製鉄に最も良い粘結用石炭なので治安が悪くても石炭が採れればよいという方針だった。

真夜中の二時頃重慶の密偵からB-29エンジン始動、出撃の徵ありの暗号電報が入ると、朝、戦闘準備を完了して待機。満州の重工業施設の爆撃が主で高々度で頭上を通過するので射撃するが弾丸が届かない。

ようやく戦地に来たと思つたら教育関係の経験があるので三月、支那派遣軍経枝下士官候補隊区隊長を命ぜられ天津の野戦貨物廠内の候補者隊に着任、授業は週一日、朝夕二時間の自習時間の指導が大事な任務、卒業

前に考科書を作成しなければならない為、生徒に接することが大事なのです。七月末過労のため黄疸になつてしまつた。

万分の一の地図で射撃の為の距離、砲目高低、方位角等を計算して射撃したところ、共産軍に命中し歩兵部隊から感謝されたのが私の自慢の一つであります。

八月上旬原隊復帰、戦況悪化、炭坑占領のため、米軍の第八海兵隊重慶軍八路軍が殺到、一時大混乱になつた。

同地には日本軍、満州國軍北支の新政府軍がおつたが、

住民に最も信頼されたのは日本軍でした。八路軍（共産軍）二十万に十二月中旬迄包囲され、毎日の様に地上戦

闘に従事した。潜水艦を射撃できる新しい高射砲を持つ

ていた為多くの友軍を救つてやりました。高射砲と地

上砲どは射撃の方法はまったく異なり野戦砲出身は私

一人だけで観測班の教育から始めなければならなかつ

た。

夜間包囲された歩兵部隊の援護射撃は参謀本部の五

同じ軍隊で何の苦勞もなかつたが、共産軍が撤退した十二月から物資はなくなり、陣地の周りには商人が店を開きだした。敗戦国の紙幣は紙屑同然で通用しない。北支

は衣類が豊富だったので、新品二着分を支給されたが、

内地の風聞を聞いてるので大事に保管しているのに

古参兵は盗み出して商人と物々交換する様になつてしまつた。

親兄弟以上に助け合つて苦楽を共にした戦友の絆がすっかりこわれてしまつたのにがっかりしてしまつた。

弾薬手なげ弾は個人支給のままだつたので、物品を扱つてゐる炊事班長を手なげ弾安全装置をはずして脅迫する始末。北支の引揚げは二年後と聞いた時は啞然としてしまつた。夜中にトイレに行き用を眺めて涙をこぼしましたことも何回かありました。悪い人は数人なので良い兵隊さんを護る為、毅然たる態度で軍紀保持に努めました。

時には煽動者と軍刀一本で睨み合つたこともあります。乗船したら黄海へ葬つてやると公言する始末。

二十一年一月中旬、武装解除後警護役の重慶軍の態度、住民からの迫害、米軍の輸送船の取り扱い、しゃくにさ

わる事ばかりなので省略します。

二月五日朝、佐世保港に入港、上陸甲舟艇（千人乗船）の扉が開いて目に入った祖国の緑の山々、日本家屋が目に焼きついて未だに忘れられません。

「命を大切に」

成井 千栄子

戦争は在つてはいけない事です。人々の苦しみ、そして大切な命を亡くしてまで国のためにつくす日本国民の義務でした。どんな苦しみにも耐えてがんばっていたのですが負けいくさになってしまいました。

私の兄も志願で少年パイロットで戦死しました。その当時埼玉に航空学校があつたそうです。

昭和十九年春、東京も全部焼けて、何にもありません。そして夏には八王子の市内は全部焼けて灰ぼこり、人の焼けたこげくさい香りで一杯でした。私はその時は、八王子にいました。関谷市長さんは町と一緒に人々を心配しながら亡くなつてしましました。本当は立川基地をね

※内容によっては一部校正・割愛しております。

らつたのが八王子になつてしまつたのです。立川はども焼けていませんでした。今の若い人達にはそういう事はわからないでしょう。学用品も大事に使つていた時代です。品物は大切に戦争に勝つ迄はとみんな励ました。できました。毎日、敵の飛行機が最初はB29、四千メートルの上空を飛ぶときはまだよかったです。一ヶ月位たつて艦載機が編隊で五機位ずつ六回位が今度は低空を飛んで来る毎日。人の頭が見える位の低い高さ。本当に毎日の命が内地にいても一日一日が怖くなつてきていました。これでは生きていられるのか心配する毎日でした。

送人歸故鄉
王昌齡

長安城內望火光，
長安城外馬黃黃。
近來莫使愁心急，
急急愁心急急。

送人歸故鄉
王昌齡

長安城內望火光，
長安城外馬黃黃。
近來莫使愁心急，
急急愁心急急。

送人歸故鄉
王昌齡

長安城內望火光，
長安城外馬黃黃。
近來莫使愁心急，
急急愁心急急。

編集及び発行 杉戸町住民参加推進課 国際化担当

住所 〒345-8502 埼玉県北葛飾郡杉戸町清地2-9-29

電話 0480-33-1111 (内線285)

ホームページアドレス <http://www.town.sugito.saitama.jp/>